

大杉谷国有林からの手紙

10通目 ～木枯らしに吹かれて～

大杉谷を吹き抜ける風に思わず身をすくめる季節となり、様々な色で着飾っていた木々の葉が林道に絨毯のように広がっています。

厳しい冬を前に、今年も私たちの目を楽しませてくれます。

大杉谷の登山道は、11月24日に閉山し、大台ヶ原のビジターセンターも12月1日に業務を終了します。そこで、ビジターセンターの方に今シーズンを振り返ってもらおうと、「今年は、全体的に雨の日が多かったり、紅葉が色づきはじめた頃に台風がきたりと、天候の



今年の大杉谷の紅葉

影響を受けた年でした。でも、例年どおり、春先の芽吹き、夏の正木ヶ原を吹き抜ける風、秋の山を彩る紅葉と、豊かな自然に触れあうため、約9万人の皆さんが大台ヶ原・大杉谷を訪れてくれた。」とのことでした。

すっかり木々の葉が落ち、今年の登山シーズンは終わりましたが、大杉谷国有林では、今も人知れず事業を実行中ですので、今回は、今年度実施している間伐や植生回復などの森林整備事業をご紹介します。

(1) 水源地としての森林の整備

皆さんは、「大杉谷国有林」と聞くと、ブナなどの広葉樹に覆われた森をイメージされるかと思いますが、かつては、ヒノキなどの針葉樹の大径木が多くありました。このため、古くは伊勢神宮の造営用材の山、「御そま山」としてはじまり、長年にわたり林業が営まれてきました。

その結果、国有林面積、約4,380haのうち48%がスギやヒノキの人工林となっています。

これらの木々は私たちの先輩の皆さんが、人里離れた奥山で、寝泊まりしながら、黙々と植え、育ててきたものです。また、大杉谷国有林



間伐により明るくなった林内

は、日本有数の清流である宮川の源流部にあります。このため、水原涵養機能など公益的な機能が十分に発揮できるように、今年度も約150haの間伐を行っています。間伐により林の中に光を入れ、下層植生が元気に育つ、健康な森林を造っています。

また、大杉谷国有林には、シカの食害によって樹木がなくなってしまった箇所があります。

このような箇所では、台風や集中豪雨による激しい雨が直接地面を叩き、年々表土が流され、やがて大きな崩壊地になるおそれがあります。

このため、学識経験者の方や地元の宮川森林組合の皆さんと連携し、大杉谷国有林で採取した種から育てた地域性苗木を植栽するなど、植生の回復に取り組んでいます。

植栽に当たっては、どこにどのような樹種をどのように植えるのが重要です。今年も、4月に県や市町、森林組合の皆さんに参加してもらい、現地学習会を行いました。春に植えた苗木は、夏の日差しを浴び、葉を大きく広げており、来年、どのくらい成長するか、今から楽しみです。これからも、新しい技術をどんどん取り入れて、一日でも早く、少しでも多くの森林に緑を取り戻していこうと考えています。

また、そんな取組を多くの人に知ってもらいたいので、林道沿いにモデル箇所を設置してみました。興味のある方は、是非一度、授業参観にお越し下さい。お待ちしております。

（2）シカによる森林被害対策

次にシカ被害対策です。前回、ご紹介した「シカ被害対策緊急捕獲等事業」は、いよいよシカの季節移動の時期を迎えるので、1週間ほど休み、その間で自動撮影カメラのデータを基に作戦を練り、再開準備中です。

また、シカの生息状況調査も平成20年度から継続中で、今年度も11月上旬に糞塊密度調査が終了しました。今は、夏に日出ヶ岳の近くで捕獲し、GPSを装着したシカの行動を追跡調査しています。これらのデータは、緊急捕獲事業で得られたデータと合わせて、専門家や地域の皆さんの意見を聴きながら、来年度の対策に反映させていくこととしています。

大杉谷でのこれからの作業は、積雪などにより益々厳しくなってきますが、安全を第一に、大杉谷の豊かな自然を未来に繋ぐ取組を日々着実に進めていきたいと思っております。

（発行：三重森林管理署 尾鷲森林事務所 地域統括森林官）



現地学習会での地域性苗木の植栽状況



夏の日差しの中で葉を広げる苗木たち



いまま稼働中の自動撮影カメラ